

「多元的国家の形成過程と日本」に関する研究実績報告

The Formation Process of Multiethnic Nations and Japan

総括研究員：竹村民郎

分担研究員：鎌田武治 伊沢久昭

鎌田研究員は世界市場経済の段階にはそれ以前の段階にみられた多元的国家はいかなる方向をとるかという課題について言う。かつて多民族国家を志向していた多元的国家は多重的国家システム（Pluralistic State System）への趨勢を志向し、この段階において民族（ethnic）から段級（classes or status）への視点がふたたび重視されてくるのではなからうかと指摘する。鎌田研究員はこうした視点から19世紀イギリス・ラディカルたちの国際認識を問う。その研究成果の全体像については、近刊の鎌田武治『市場経済と協働社会思想』（未来社 2000年）の第1部及び第2部第1章、第2章、第4章を参照されたい。

伊沢研究員は民族意識の形成

奇妙な話であるが、民族学の中核的概念であるにも拘わらず、確定的な民族の定義は未だ構築されていない。これまで客観的基準と主観的基準からアプローチが行われてきた。客観的基準とは「特定の地域で同一の文化的要素、言語、宗教等を共有する人々によって構成された連帯感のある共同体」という理解である。他方主観的基準としては「われわれへの帰属意識がもっとも重要である。同じ民族であるという意識は構成員に対して安心感を与えることになる。民族意識は自他を区別することによって生まれてくる。それは個人の自由意志とは関わりなく一つの集団の中に生まれ養育される枠組みの中で醸成されるが、他面において教育で作為的、政治的に形成される部分も大きい。従って民族意識は流動的、弾力的な性格も強い。

竹村研究員は近代日本における海洋帝国構想の諸類型を抽出する過程で、知識人が沖縄、北海道のアイヌについてどのように語っていたかを分析している。近代国家形成期日本の知識人は欧米列強へのキャッチアップを目標に掲げて、単一民族社会の神話を共有しつつ国民国家への統合を志向した。アイヌや沖縄について知識人がどのように考え行動したかについて考察することは、日本の近代国家形成の真実についてひろく認識することである。竹村研究員はとくに1999年において沖縄と北海道を訪問し、大学、諸研究機関等を通じて、同地域の研究者と交流を深めた。また研究に必要な資料の収集をひろく行なった。

1999年秋、竹村研究員はハワイ大学を訪問して、同大学の研究者と民族問題、移民問題の検討を通じて、多元的国家形成の諸問題を統括する予定である。

研究参考文献竹村民郎「十九世紀中葉日本における海洋帝国構想の諸類型－創刊期『太陽』に関連して」国際日本文化研究センター紀要『日本研究』第19集1999年6月

トルコとクルド民族、ユーゴスラビアとアルバニア系住民の対立抗争など、従来の社会科学では解きえない民族問題の台頭に直面して、社会科学はその理論的枠組みを根本から

再構築する必要に迫られている。こうした社会科学の限界を十分に反省し、我々は来るべき共同社会の創出にむけさらに本共同研究を積重ねたいと念願している。